

平成24年度学内教育GPプログラム事業経費 成果報告書

区 分	継続型
事業名称	国際的に通用する生命情報学を使いこなせる女性人材の育成 (平成21年度終了事業「女性リーダー育成プログラム(生命情報学を使いこなせる女性人材の育成)」の継続、および平成22年度終了事業「国際化加速プログラム」の継続)
取組代表者名 担当者名	* 事業担当者は全員記入してください。 代表者: 由良 敬 担当者: 松浦悦子、小川温子、相川京子、近藤るみ、油谷幸代(客員)

1. 成果の概要

実施した事業の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、当初設定した目的・目標に照らし、3ページ以内で、できるだけ分かりやすく記述すること。必要に応じ、図表を用いても構いません。

本事業は、平成17年度「魅力ある大学院教育イニシアティブ(理工農系)」(平成18年度終了)と平成19年度「女性リーダー育成プログラム」(平成21年度)および平成20年度「国際化加速プログラム」(平成22年度終了)を融合し、大学院における生命情報学の教育を英語による講義実習も含めて継続する事業であった(<http://cib.cf.ocha.ac.jp/INFUKU/>)。平成25年度の現在も、恵贈中である。

本事業では、本学大学院ライフサイエンス専攻において、学生の生命情報解析技術の習得をめざして、平成17年度より、「総合生命科学」「生命情報学」「生命情報学演習」「予測生物学」(いずれも大学院共通科目)を大学院副専攻として開講してきた。平成24年度は、以下の講師陣営でこれらの科目を開講した。

「生命情報学」(4月～6月): 担当教員 由良 敬(本学教員)

「生命情報学演習」(6月～7月): 担当教員 加藤 毅(本事業による非常勤講師)

「予測生物学」(10月～11月): 担当教員 Martin Frith (本事業による非常勤講師)

油谷幸代(本学客員准教授)

Daron Standley(本事業による非常勤講師)

亀田倫史(本事業による非常勤講師)

小串典子(本事業による非常勤講師)

「総合生命科学」(10月～1月): 担当教員 4大学連携教員によるオムニバス

なお、予測生物学の一部は英語による講義演習を行った。平成24年度は、本副専攻を9名の大学院生(理学専攻6名、ライフサイエンス専攻3名)が受講し、各自が、生命現象を数理的に理解するために必要な数理的解析力を習得した。

本事業では、副専攻での教育効果を高めるために、履修生全員にマッキントッシュのノートPCを貸与している。従来までは、これらノートPCの管理貸し出し業務を物理的なノートで行ってきた。しかし教職員が極度に減少する中、この状況ではノートPCの管理貸し出しができなくなってしまう。そこで、平成24年度に**本事業によりAAを1名雇用し**、ノートPCの自動管理システムを構築し(下図参照)、現在稼働中である。システムには過去の実績をすべて入力し、これらの管理貸し出しはすべてこのシステムで行うこととした。この結果、副専攻に専属の事務担当者がいなくても、ノートPCの貸し

出し状況や貸し出し履歴の確認および、貸し出しの手続きができるようになった。

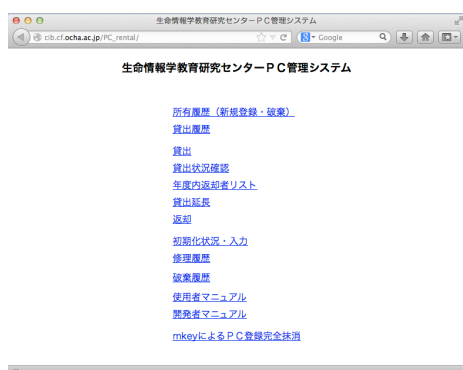


図1: システムログイン直後画面



図2: ノートPC資産リスト(一部)

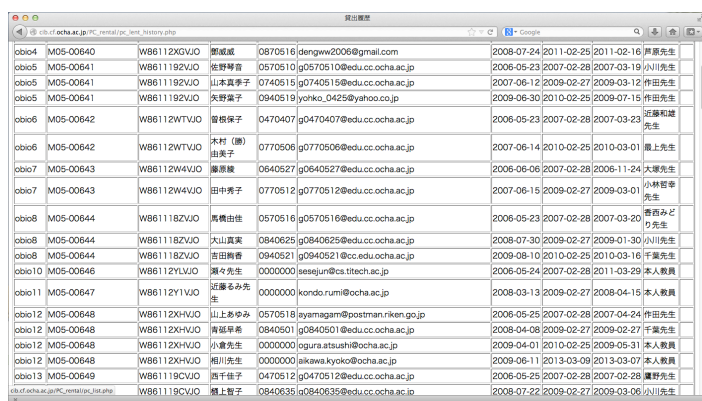


図3: ノートPC貸し出し履歴



図4: 貸し出し登録画面

2. 今後の取組み継続に係る実施体制及び資金確保の状況について

本経費は、学外の競争的資金等によるプロジェクトで、プロジェクト実施期間終了後も引き続き取組みを継続するための体制を整備するために配分されたものです。本経費の支援期間終了後の実施体制及び資金確保の状況について記述してください。

平成25年度は、引き続き学内教育GPプログラム事業経費をいただき、大学院生から見たときには、平成24年度と同様の規模で副専攻を運営できるようにしている。平成26年度以降は、理学専攻に復職する生命情報学を専門とする教員、ライフサイエンス専攻に所属する生命情報学教員(客員を含む)、および4大学コンソーシアムの協力により継続する。アカデミック・アシスタントと「バイオインフォマティクスへの招待」セミナーに関しては、外部資金を利用する。

外部資金の利用の一環として、理系からのリーディング大学院申請にあたって、本副専攻の実績を利用した。リーディング大学院申請が採択された際には、生命情報学副専攻を発展的に解消し、自然科学全般にわたる理系大学院生の基礎力を強化するプログラムにすることも検討中である。